



日本レイ・アームストロング協会 ワンダフルワールド通信 No.99

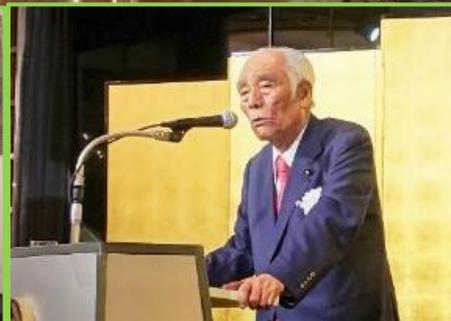
日本レイ・アームストロング協会（ワンダフルワールド・ジャズ・ファウンデーション＝WJF）2018年5月発行
〒279-0011 浦安市美浜 4-7-15 WJF 事務局 TEL:047-351-4464 FAX:047-355-1004 Email: saints@js9.so-net.ne.jp

ホームページ <http://wjf4464.la.coocan.jp/>

発行人 代表・外山喜雄 編集長・山口義憲 編集・小泉良夫

石井一さんの新著「グリーン上の政治家たち」の出版を祝う会 セインツなどゆかりのミュージシャン迎えた「陽春ジャズの夕べ」も 3月29日ホテルニューオータニ大広間「鳳凰の間」で華やかに同時開催

石井一さん（元国務大臣）の新著「グリーン上の政治家たち」（産経新聞出版）の出版を祝う会が3月29日午後6時からホテルニューオータニの大広間「鳳凰の間」で開催された。このパーティーは2部構成で、後半は午後7時から石井さんが会長でもある一般社団法人「日本ジャズ音楽協会（JJMA）」ゆかりのアーティストを迎えて「陽春ジャズの夕べ」が華やかなステージを繰り広げた。もちろん第1号の「ジャズ大賞」を受賞した外山喜雄さん率いるデキシーセインツが中心となって、政府から表彰を受けたアーティストらが次々とステージに上り、熱演を繰り広げた。（写真：相馬威宣、細川ハテミ、構成：小泉良夫）



セインツを中心にゆかりのジャズミュージシャンが次々に出演（写真上）。華やかな和服姿でファンをトリコにしたボーカルの阿川泰子さん（同下の左、左端はピアニストの秋満義孝さん）。出版を祝う会冒頭で挨拶する石井一さん（写真左）。

大賞など受賞の日本を代表するジャズメンがステージを埋める
ジャズファンも参集！大盛況の「陽春ジャズの夕べ」
 「日本ジャズ音楽協会」のお披露目もあってデキシーセインツも熱演

**著名な政治家も次々壇上からスピーチ
 安倍晋三総理からも祝辞のメッセージ**

石井一さんの新著「グリーン上の政治家たち」(写真下)のお祝いと、昨年発足した一般社団法人「日本ジャズ音楽協会」(石井一会長、佐藤修理事長)のお披露目、そしてジャズ大賞や文化庁長官賞、文部科学大臣表彰等、同協会の推薦で受賞した日本を代表するジャズメンへのお祝いも兼ねて開催されたパーティーは、午後6時に開宴、600人を超える出席者で大盛況となった。



石井一さんは神戸の甲南大学時代からゴルフ部に所属しゴルフ歴60有余年。著書には田中角栄、大平正芳、中曽根康弘ら総理経験者各氏のほか、ゴルフ好きで知られる日本と世界の歴史に名を遺した政治家も多数登場している。

石井さんの挨拶に続き、自民党幹事長二階俊博氏、衆議院議長大島理森氏らが次々と壇上からスピーチ、西村康稔官房副長官からは、安倍首相のメッセージ「今後も私のゴルフスタイルと同様、丁寧かつ謙虚でありつつ、全力でさまざまな改革に取り組んでいきたい」との祝辞も披露された。

**WJF 会員もびっくりの元総理らも顔をそろえる
 逃亡生活中のタイの元首相兄妹もお忍びで…**

第2部の「陽春ジャズの夕べ」では、ジャズ目当てで参加した日本ルイ・アームストロング協会の会員をはじめジャズファンもびっ

くり！の鳩山由紀夫、菅直人元総理や海江田万里、興石東、亀井静香、藤井裕久各氏ら多くの政治家が顔をそろえ(写真上)、石井人脈の広さを現わしていた。



石井さんと厚い親交のあるタイの元首相、タクシンさん、インラックさん兄妹もプライベート・ジェットで日本にやってきて参加！お2人はタイで有罪判決を受け、海外で逃亡



生活を送っている。この両氏の来日は驚きのニュースとして後日、報道された(左記事は、30日付の産経新聞)が、暗殺の危険もあるとかで当日厳しい警備も敷かれていた。

午後7時、2部がスタート、パーティションが取り払われるとともに外山喜雄とデキシー

セインツ(写真下)の「この素晴らしき世界」の演奏が始った。セインツの2曲目「ハロー・ドーリー！」では、会場のジャズ行進も入り、「ブラボー」の掛け声もかかり、大いに盛り上がった。出版記念、政治パーティー、そして「日本ジャズ音楽協会」の存在感を示す素敵なジャズ。ジャズファンとともに政治家の皆さんも、その洒落な雰囲気とスウィングを大いに楽しみ、政治とジャズがともに引き立てあう、素敵なパーティーとなった。



ジャズの集いは、元FM東京で有名音楽番組「ジェットストリーム」等を担当された小針俊郎さんの司会で進行。まずは2017年までにジャズ大賞や文化庁長官表彰、文部科学大臣表彰等を受けたジャズ界を代表する人々がステージに登壇し、紹介を受けたあと、全員による大ジャムセッションへと移った。

登壇したのは次の人々(敬称略)。2014年文化庁長官表彰の前田憲男(ピアノ、作編曲、指揮者)、同2015年瀬

川 昌
久(評
論家)、
同201
6年内
田 晃
一(ジ
ャズワ
ールド
編集長、



セインツとともにサクソ3人衆も揃って熱演

ビブラフォン、代理出席高山恵子、2017年ジャズ大賞、2018年文部科学大臣表彰秋満義孝(ピアノ)、同五十嵐明要(アルトサクソ)、同外山喜雄(トランペット、日本ルー・アームストロング協会会長)、2017年ジャズ大賞阿川泰子(ジャズシンガー)、同森寿男(トランペット、森寿男&ブルーコーツオーケストラ・リーダー)、日本ジャズ音楽協会会長賞丸山繁雄(ジャズシンガー・芸術学博士)、同杉原淳(テナーサクソ)、同原田忠幸(バリトンサクソ)。ほかにスケジュールの都合で欠席の同年ジャズ大賞、文化長官表彰猪俣猛、ジャズ大賞小曾根真、日本ジャズ音楽協会会長賞松坂妃呂子(ジャズ批評編集長)、2018年日本ジャズ音楽協会会長賞西村協(ジャズシンガー)。

あの「パーデイド」でジャムセッションの幕開け ジャズブームを巻き起こしたJATPのあたり曲

ジャムセッションの幕開けは「パーデイド」。この曲は1953年に来日して日本にジャズブームを巻き起こしたジャズ・グループJATPのあたり曲。若き日のオスカー・ピーターソンやレイ・ブラウン、ジーン・クルーパ、ロイ・エルドリッジ、フリップ・フィリップス、エラ・フィッツジェラルドほか超有名メンバー勢揃いのJATPA 来日を実現させたのは、石井一さんのお父様で日本マーキュリーレコード社長だった石井廣治さん。石井さんのジャズへの思いの原点を、五十嵐、杉原、原田各氏のサクソセクション(通称KKB=後期高齢者バンド)を中心に楽器プレイヤー全員でスウィング。続いてこの名誉ある日に意気込みを込めて、素敵な和服で登場の華麗な女性シンガーの大御所、阿川泰子さんが登場、前田憲男(p)、藤崎羊一(b)、サバオ渡辺(ds)とKKB一人一人のサクソを



バックに3曲、「フライ・ミー・トゥー・ザ・ムーン」、「アイブ・ゴット・ユー・アンダー・マイ・スキン」、「アワ・ラブ・イズ・ヒヤ・トゥー・ステイ」で聴衆を魅了した。

亀井静香さんがアカペラで♪おか〜あ〜さん… ジャズならぬ浪花節調で日本新党の当時の党歌

次に登場した男性シンガーは、何と大政治家、亀井静香さん! アカペラで披露したのは、ジャズならぬ浪花節調で、♪おか〜あ〜さん…(写真左下)とその昔、日本新党を作ったときの党歌。ジャズファンはあつけにとられながらも大喜び。続くピアノソロは、文科大臣表彰を受けた秋満義孝さんの「アズ・タイム・ゴーズ・バイ」。前田憲男さんも先輩の演奏を楽しんでいた。



続けて登場した石井一さんは、セインツと共演で「思い出のサンフランシスコ」、何とバースから歌って大喝采を受けた(写真左)。次いで石井さんがボーカルレッスンを受けているジャズ歌手丸山繁雄さんが、カウント・ベイシーの「シャイニー・ストッキング」を有名なジョン・ヘンドリックス直伝のスキヤットを交えて熱唱。さらに石井さんとのデュエットで「オール・オブ・ミー」。バンド全員による「A列車で行こう」、そして「聖者の行進」、日本を代表する受賞ジャズメン・オールスターズによる「陽春ジャズのタベ」は、好評のうちに幕を閉じた。

石井一さんから佐藤修理事長にお礼の電話 「会の成功はジャズの皆さんのおかげです」



(左から)佐藤美智子さん、中村美代子さん、磯野博子さん)もにこやかに参加



(左から)細川ハテミさん、恵子さん、相馬浩子さん、サー・チャールズ・ストンブソン夫人、外山さん

有名ミュージシャンの皆さんとの連絡に当たった日本ジャズ音楽協会、佐藤修理事長(元日本レコード協会会長)も

大喜び。翌々日には石井一さんからお礼の電話が入り、「会の成功はジャズの皆さんのおかげです。永田町ではジャズが評判になっています。ありがとう!!」とのメッセージが寄せられた。

(外山喜雄)

私が大きな影響を受けた3人のジャズ評論家

野口久光、河野隆次、油井正一先生方

柳澤安信 (会員、特別寄稿)

ジャズが好きになると「自分もこのような演奏をしてみたい」と楽器を持ってミュージシャンを目指す人と、「もっといろいろな演奏を聴いてみたい」とリスナーの道を歩む人がある。私は後者の道を歩んできたが、ジャズを聴き始めた頃は特に、ジャズの歴史、ジャズの巨人の楽歴とそのレコードに興味を持った。ミュージシャンを志す人は、更に楽器の奏法やスタンダード・ナンバーを習得せねばならない。いずれの道を歩むにせよ、「ジャズの歴史」を系統立って把握していなければどうにもならない。それには「レコードを聴くこと」と「そのガイド」が必要になる。私にとっては、ジャズ評論家の先生方のレコード・ジャケット解説、ジャズ専門誌の論文、ラジオ放送解説、単行本などがどれ程役に立ったか計り知れない。特に野口久光、河野隆次、油井正一の3人の先生方には大きな影響を受け、いつも頭の中にある親の様な存在である。この先生方の思い出に入る前に、その先輩格の野川香文氏と村岡貞氏に少し触れたいと思う。

ジャズ評論の草分け 野川香文氏 日本人による最初のジャズ鑑賞本も



野川香文氏(写真下)は文字通り日本のジャズ評論の草分けである。早稲田大学建築科を卒業後「時事新報」に記者として勤めたが、昭和10年頃当時の先端を切ってジャズ評論家に転じた。ジャズを本格的に研究し出したのが昭和5年(1930年)頃からで一時、大井蛇津郎(大いにジャズろう)というペンネームで知られた

こともあったという。その後の評論家は大なり小なり野川さんの教えを受け、影響を受けているといっても過言ではない。野川氏は肝臓、腎臓の持病があり、昭和32年(1957年)7月31日脳出血で亡くなった。私は野川さんとは面識はなく、高校時代、野川さんの「追悼番組」をラジオ東京(JOKR)の「イングリッシュ・アワー」



で聴いていた。出演した評論家諸氏が「日本のジャズ評論の先駆者



で、オールマイティな評論家だった」と回想していたのを覚えている。なおイングリッシュ・アワーは志摩夕起夫氏と国一郎(三国一郎)氏が一週間交代で解説するジャズの深夜放送である。日本語の解説に続き外国人アナウンサーによる英語解説があり、その後にレコードがかかった。野川香文氏の著書には「ジャズ音楽の鑑賞」(新興音楽出版社、昭和23年11

月=写真下)がある。これは日本人が書いた最初のジャズ鑑賞本といわれている。野口久光氏のジャズメン・イラストも素晴らしい。



代表作は「ジャズ楽曲の解説」(同左下=千代田書房、昭和26年9月)であろう。名言“ジャズ音楽には名曲というものはない。けれど、素晴らしい演奏、名演がされた場合においてだけ、それは名曲だといえる”は、この本から生まれた。

ホット・クラブ・オブ・ジャパン初代会長 村岡貞氏は中古レコード店のオーナー

ホット・クラブ・オブ・ジャパンの初代会長、村岡貞氏(写真左下)は神田神保町2丁目、村田簿記前にあった「リズム社」という中古レコード店のオーナーであった。スイング・ジャーナル誌の広告に、“ホット・クラブ・オブ・ジャパンの会員申込所”(同左下)と書かれていて、東京に出てきた私は、早速入会手続きのためリズム社を訪れた。村岡さんはちょっとお役人風

な気難しそうなおじさんだった。店内にはジャズの

洋書も置かれていて、海外のジャズ愛好団体

との日本窓口を兼ねたレコード店である。野口久光氏デザインによるレコ



ホット・クラブ・オブ・ジャパンの雑誌

ードをイメージしたバッジを購入、念願のホット・クラブ会員になった。リズム社はマニア向けのレベルの高いお店で、初心

者だった私は頻繁にレコードを買いに行った記憶はない。

お金を払うと村岡さんが「外に出て待っている」という階段を上がっていった。店から外に出ると2階の窓が開き、紐につるしたカゴが下りてきて、その中におつりが入っていた。ユニークなお店だった。村岡さんも昭和37年(1962年)12月に亡くなった。このリズム社を次の時代に引き継いだのが、同じ神保町西島経雄氏の「トニー・レコード」と新宿駅西口、岡郷三氏の「コレクターズ」だったと思う。

ホット・クラブの当日、新橋の蔵前工業会館へ行くと、受付に村岡さんが座っていた。当時は2代目会長の野川香文氏が亡くなり、次の会長が野口久光氏になり、村岡さんは渉外書記長をされていた。会員には池上悌三、牧芳雄、藤井肇、石原康

行、油井正一、河野隆次、飯塚経世、久保田二郎、瀬川昌久、中村宏、大橋巨泉、イツノテルヲ、福田一郎、青木啓、湯川れい子など、錚々たるメンバーがそろっていた。このホット・クラブで、ラジオの解説でしか聴いたことがなかった大先生の生の解説を聞き、やがては会話をし、更に二次会でジャズ談義をするようになるとは、夢にも思わぬことであった。

野川氏と共に戦前から音楽評論 野口久光氏 ビックス・バイダーベックの大ファンでもあった

野口久光氏(写真右)は野川香文氏と共に戦前から音楽評論をされた草分けの一人で、ジャズのほかに映画評論、ミュージカルなど、幅広い分野で活躍されたことでも良く知られている。

権威ある批評家の先生方と直接話をする事は、自分のジャズの知識との差を考えると、なかなか出来ることではない。ホット・クラブの例会でも、批評家諸氏と一般会員とは先生と生徒のような関係で、気楽に会話出来る雰囲気ではなかった。そんな中で野口さんは大変庶民的な感覚で我々に接して下さった。野

口さんは同じ業界で働く者には厳しかったと聞くが、我々ジャズ・ファンには大変優しく親切だった。アマチュア精神を重んじ、コマーシャルに妥協することには反発した。

野口さんと初めてお目にかかったのも、初めて会話したのもホット・クラブの例会だったと思う。レコードのジャケット解説、

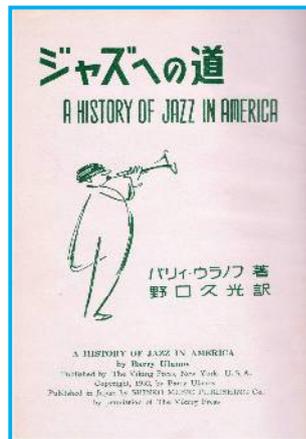


野口久光氏の紫綬褒章受賞を祝う関東ディキシー組合特別例会 (高田馬場BIG BOXにて、昭和53年[1978年]6月) 前列左より=イツノテルヲ、池上悌三、油井正一、野口久光、谷口又士(tb)、行田よしお 中列左より=山中一男、山下貢、佐藤秀樹、大和明、小川正雄、飯塚経世 後列左より=武信昭雄、柳田利明、大山達郎、若林総一郎、柳澤安信(敬称略)

スイング・ジャーナル誌の論文、単行本「ジャズへの道」(新興楽譜出版、昭和30年=写真下中央)、ジャズメンの素晴らしいイラスト、LPジャケットのデザイン、映画ポスターの製作と評論、更にミュージカル評論とレパトリーの広い偉い先生であることは以前から承知していた。毎月の例会で私がビックス・バイダーベックのフ

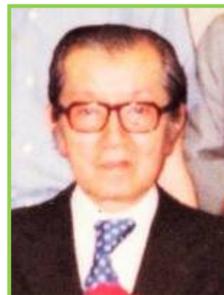
アンであることを知った野口さんが「君、ビックスが好きなの、よいね！」と声をかけていただいた。

昭和50年(1975年)日本ビクターがLP100枚からなる「RCAジャズ栄光の遺産シリーズ」という企画を立てた。その中の「白人ジャズの巨星たち」(写真下=Victor RA-17/22)6枚組みの4枚が「ビックス・バイダーベック」で、その選



曲・解説を私が担当したとき、「やったね！」と褒めていただいた。野口さんはデューク・エリントンの作品をこよなく愛されていたが、ビックス・バイダーベックの大ファンでもあった。

昭和53年には永年芸術文化の第一人者として活躍された功績から、紫綬褒章を受章された。ホット・クラブ主催による「祝う会」が催され(写真上の中央)、私は渡辺貞夫夫人とペア



を組んで受付を担当した。ロビーにいたので内部の様子の記憶がないのが残念だが、会が終わって花束を抱えてタクシーに乗る野口さんをお見送りの覚えがある。

行田よしお氏と有田昭一氏が発起人となって始めた「関東デキシー組合」は、昭和51年(1976年)から62年(1987年)まで続いたが、野口さんはその組合長を引き受けられ、毎月の例会には必ず出席した。この会の活動目的は、ミュージシャンとのコミュニケーションを深めながら、一人でも多くのデキシーランド・ジャズ・ファンを増やしていこうというもので、有名ミュージシャンではなく、地味であっても情熱のこもったユニークな演奏を目指しているバンドに演奏の場を提供していくものであった。このデキシー組合でも紫綬褒章受賞を記念して「会長を囲むジャム・セッション」が行われた。当時私も幹事の一員で例会には毎月参加したが、コンサート終了後に出演したミュージシャンと野口さんを囲んで、コーヒーを飲みながら懇談するのも、この会のもうひとつの楽しみになっていた。

昭和58年(1983年)には勲四等旭日小綬賞を授与され、この時も関東デキシー組合主催による「祝う会」が催された。野口さんはデキシー組合のような草の根的な啓蒙活動には人一倍協力を惜しまない人で、それは小劇団「ふるさときゃらばん」への熱烈な支援にも表れている。それから大阪のニューオリンズ・ラスカルズの大ファンで、土曜日の午後にはちょっと思い立つと、新幹線に乗って梅田の「ニュー・サントリー・ファイブ」まで聴きに行ってしまうというのだから、相当なものである。

野口さんが監修した「グッド・オールド・デイズ:ニューオリンズ・ラスカルズ・アット・白い異

人館・神戸」(写真上の左=Victor SJX-20186)は、数あるラスカルズのレコードの中でも、名盤中の名盤とされている。

趣味はビデオ撮影とその編集だったのではなからうか。コンサート会場の暗がりには三脚を立て、映画監督のようにカメラを回している人がいるので、誰かと思ったら野口さんだった。それが一度だけではなく、いつもやっているのには驚いた。また貴重な映像をコピーしてプレゼントする親切な面もあり、先生からいただいたアメリカのテレビで放映されたドキュメンタリー番組「BIX : produced and directed Brigitte Berman」



は、私の宝物になっている。これは道路をかけて走る珍しビックスの動画があり、ホーギー・カーマイケル、ジェス・ステイシー、ドック・チーサム、アーティ・ショウらがビックスの思い出を語ったビックス・バイダーバック物語で、日本では公開されていない。

平成4年(1992年)5月、日本でもビックス・バイダーバックの伝記映画「ジャズ・ミー・ブル

ース」(写真上)が封切られた。平成3年の暮れ、私は野口さんからの突然の電話でこの映画の存在を知った。それから封切りまで、野口さんと新橋の日本ヘラルド映画で何度も何度も試写を見たことも忘れられない思い出である。野口さんが阿川泰子氏も誘っていて、終了後3人



第17回全日本デキシーランド・ジャズ・フェスティバル、武庫川学園甲子園会館(昭和57年[1982年]6月)、(前列左より) 山中一男、末廣光夫、河野隆次、(中列左より) 有田昭一、松坂妃呂子、有田夫人、不明 (後列左より) 柳田利明、若山一雄、ジェフ・ブル(tp)、柳澤安信(敬称略)＝河野隆次さんと筆者が写った唯一の写真

で地下の喫茶店に入り、映画を肴に懇談したこともあった。

野口久光氏は明治42年(1909年)8月9日栃木県宇都宮市生まれ。昭和8年(1933年)上野の東京美術学校(現・東京芸大)を卒業、東和商事(現・東宝東和)に入社した。当時は不景気な時代で、絵かきになっても食えないと思い、商業美術の仕事をしたと思ったという。筈見恒夫氏と組んで欧州映画の宣伝に従事、数多くのポスター製作を行う。父親は職業軍人で厳しかったが、浅草にもものわりのいい叔父がいて、良く映画に連れて行ってもらったという。戦争中の三年半は日中合弁の映画会社に勤め、上海に滞在した。当時の上海は活気があり、日本には無いオーケストラやバレエ、オペラもあったという。戦後は再び映画会社に籍を置く傍ら、ジャズ、ミュージカルとそれまで日本ではあまり知られていない西洋文化の紹介に努める。戦後一時映画のプロデューサーの仕事をしたこともあったという。私は見たことが無いが、野口さんが製作した映画に新東宝の「見たり聞いたりためしたり」(1947)、「浮世も天国」(1947)、「エノケンのとび助冒険旅行」(1949)がある。

ジャズは教えてもらったわけではなく、自分で感じて発見したという。ダンスホールなどでの一連の演奏の中に、クラシックとも違うし、ダンス・ミュージックとも違う新しい音楽があった。アメリカ映画の中に、ベニー・グッドマンやデューク・エリントンが出てくる場面があると興奮し、これがジャズなんだなあと感じた。それに惹かれて雑誌に書き始めるようになったのだという。

野口さんは高齢になられても大変お元気だったが、平成5年体調を崩され年末に胃の手術をされた。レコード・コレクターズに創刊号から「私とジャズ」を寄稿していたが、12月号で連載が中断した。手術後の経過が良好で退院し、平成6年6月号向けの原稿を寄稿したが5月末に再入院、平成6年(1994年)6月13日、胃がんのため84歳でなくなられた。「私とジャズ」の6月号は「ジャズも歌えたポップスの女王ダイナ・ショアの思い出(上)」で、これが最後の原稿ではなかろうか。

葬儀は6月16日、南荻窪の願泉寺で和田誠氏を葬儀委員長に音楽葬として執り行われた。外山喜雄とディキシーセインツや大阪からニューオリンズ・ラスカルズも駆けつけ演奏した。友



グラフィックデザイナー「野口久光の世界」から

人の中に双葉十三郎氏や淀川長治氏の顔も見受けられた。喪主を務められた長男久和氏は、昔はロック・バンドでキーボードを担当していたが、現在はジャズ界でピアニスト、コンポーザー、アレンジャーとして活躍している。

なお野口さんが生前収集した膨大なコレクションは、久和氏の意志によって、野口さんの弟子であった佐々木徹雄氏(映画の予告編製作者として著名、故人)らが整理に当たり、映画関連資料は財団法人川喜多映画記念文化財団へ、ジャズ関連資料は

岩手県一ノ関、菅原昭二氏のジャズ喫茶「ベイシー」に保管されたという。野口邸は全ての部屋が資料で足の踏み場もなく、LPレコードだけでも6万5000枚あったというから驚きだ。

平成21年(2009年)は野口さんの生誕100年の年でそれを記念してニューオータニ美術館でグラフィックデザイナー「野口久光の世界」が開かれ、11月には三越劇場で「野口久光メモリアル・コンサート」も開かれた。久和氏の EXPRESS BAND(急行[久光]バンド)にマリーンや宝塚のシンガーが花を添えた。昨年(2017年)も10月にヤマハ銀座スタジオで、「野口久光/ジャズの黄金時代展」が開催、野口さんの偉大さを改めて感じている。

NHK(JOBK)「リズム・アワー」の名解説者 河野隆次氏、名著「ジャズの事典」も出版

河野隆次氏の印象は、何ととってもNHK「リズム・アワー」の名解説とあってよいだろう。我々年代のジャズ・ファン全てがこの番組を聴いて育った。私が聴いていたのは高校生時代、昭和30年(1955年)から33年頃で、曜日の記憶はないがNHK東京第2放送(JOBK)の午後だったように思う。ビックス・バイダーベックの「アト・ザ・ジャズ・バンド・ボール」で始まり、

河野さんの簡潔明瞭な解説に、ジャズという音楽は相当奥の深い音楽であることを知った。ちょうどその頃、河野隆次著「ジャズの事典」(写真左=創元社、昭和32年8月)も出版され、河野さんが私のジャズの先生となった。この「ジャズの事典」は、ジャズという音楽を総合的に捉え、これから理解しようとしている人には便利なように、また相当のジャズ・ファンにも鑑賞の手引きとなるように作られていて、私のジャズを聴く上での必携本となった。特にこの本の第2章ジャズの歴史の中の「ディキシーランド・リバイバル」の解説は、現在でもこれほど



詳しい日本文の文献は、他には見当たらない。他の本は皆「ビ・バップ」ばかり、1940年代の「ニューオリンズ・リバイバル」が無視されているのは片手落ちだ。そういう意味からも大変貴重なジャズの歴史書である。

河野さんは大正8年(1919年)東京の生まれ、初めてジャズを聴き出したのが中学3年の頃で、それまではフォン・ゲッツのコンチネンタル・タンゴとかスペインのダンス音楽を聴いていたが満足できなかったという。そんな時にルイ・アームストロングやベン・ポラック、ジーン・ゴールドケットなどの輸入レコードを聴かされて、いっぺんにしびれてしまったという。このきっかけを与えたのが稲吉という人のようだ。それからは輸入ジャズを聴かせる喫茶店に通うようになる。本人が自分のことを不良中学生と書いているが、中学4年のころ、喫茶店で自分のリクエストした曲がなかなかかからないので、意地悪されたと勘違いし、軍事教練に行くために持っていた機関銃を店内で十数発ぶっ放したという。ルイ・アームストロングは実弾だったため少年院に送られたが、河野さんは空砲だったため、一週間の停学処分ですんだ。

これを期に、他人の所有物に頼るのではなく、自分でレコードをコレクションしようと決めた。

それからのコレクション活動は並大抵のものではなく、リヤカーに布団を一杯積んで質屋通いをして、小遣いを捻出したとのことだ。大学は早稲田大学に入学したが、卒業は昭和18年法政大学文学部英文科である。この大学時代に慶応ボーイの油井正一氏と出会い、レコードの蒐集とジャズの研究を競い合った。河野さんは油井さんより年齢がひとつ下だと思いが、ジャズとの拘わりは河野さんの方が先輩のようで、ホット・クラブの二次会の時に、神田の「天狗」という居酒屋で河野さんと隣り合わせると、「油井君は相変わらずこういう大衆酒場が好きだな」とクン呼びにしていた。河野さんは特別な秘密ルートを使って貴重盤を集めていたようで、油井さんも河野さんには一目おいていたのではなかろうか。

兵隊には昭和18年に出征、北支の自動車部隊に陸軍中尉として参戦した。この出征までに集めたSPレコードが、何と8000枚に達していたというから驚く。しかしこのコレクション

は昭和20年4月13日の大空襲ですっかり消失してしまった。その年の5月に北支から帰還して国内配属になった河野さんは、焼けこけて真っ黒に固まったレコードの山を見て、ワーワー声を上げて泣いてしまったという。



戦後は昭和21年から28年までビクター文芸部洋楽課に勤務した。河野さんはレコーディング・ディレクターとして、ビクター・ホット・クラブ(昭和22年録音)、ジミー荒木とグラマシー・シックス(昭和24年)、レイモンド・コンデとゲイ・クインテット(昭和23年)、ナンシー梅木(昭和26年)、JATA(ジャズ・アット・ディ・アサヒ)(昭和28年)など、数々のSPレコードを世に出した。その中でも

昭和27年4月にジーン・クルーパ・トリオが来日すると、そのレコーディングに奔走した。クルーパ・トリオは当時ノーマン・グランツの傘下にあり、マーキュリー・レコードの専属だったため、ビクターが発売することは常識的には不可能である。それを実現させたのは河野さんの情熱以外の何ものでも

ない。このビクター時代の作品は「オリジナル原盤による日本のジャズ・ポピュラー史:戦後編」=写真上=Victor SJ-8005 L P8枚組)に、河野さんの裏話とともに納められている。

NHKの「リズム・アワー」の前身「スイング・クラブ」が始まったのが、昭和23年7月の第一土曜日である。それから毎週土曜日の第2放送午後7時30分の放送だった。しかしこの時間帯に第1放送(JOAK)では「二十の扉」を放送していて、別の時間帯を希望する投書が続出したという。そこで水曜日の第1放送午後2時が変わったが、これもサラリーマンや学生から苦情があり、1年後には元の土曜日第2放送午後7時半に戻ったという。放送時間帯は年毎の番組編成会議で決められ、以降も変わっているようだ。番組は、初めはSPレコードによるバンド紹介だったが、16時のトランスクリプションやVディスクを使った放送も行った。もちろんベニー・グッドマンなどスイング・バンドの演奏も聴いたが、私はマグシー・スパニアやメズ・メズロウなど、シカゴ派のミュージシ



河野隆治さん(左)を迎えてのNHK第一放送「スイング・クラブ」



ン・グッドマンなどスイング・バンドの演奏も聴いたが、私はマグシー・スパニアやメズ・メズロウなど、シカゴ派のミュージシ

ヤンの演奏が強く印象に残っている。この「スイング・クラブ」は河野さんがビクターを退社し、ジャズ評論家として独立した後も続き、何と18年間に亘り日本のジャズ啓蒙に寄与することとなった。番組の終了は昭和40年(1965年)頃だったと記憶する。

河野さんを更に身近に感じたのが、スイング・ジャーナル誌の記事であった。昭和40年代までのスイング・ジャーナル誌は、まだトラディショナル・ジャズの論文も多く、モダン・ジャズは久保田二郎氏に任せ、河野さんはディキシランド・ジャズ専門のライターとして健筆をふるっていた。毎月必ず河野さんのトラッド・ジャズに関する特別寄稿や「ヒット・ソング物語」、ラジオ東京イングリッシュ・アワーと提携して読者の質問に答える「ディキシランド・ジャズ教室」があって、発売日が来るのが毎月待ち遠しかった。日本ジャズ界のスターを肴にした久保田二郎氏との「お笑い対談」も愛読した。その後スイング・ジャーナル誌はモダン・ジャーナル、広告ジャーナルの道を進み、トラッド・ジャズを愛する河野氏や池上悌三氏、飯塚経世氏は論壇を去らざるを得なくなった。

昭和38年(1963年)8月、ジョージ・ルイスとニューオリンズ・オールスターズが来日(前ページにCD写真)した。新宿厚生年金ホールは三千人以上のファンが詰め掛け、空前の熱狂的コンサートになった。大阪では長期間滞在し、オリジナル・ディキシランド・ジャズ・クラブ(ODJC)のメンバーとも交流を深めた。この時の全国ツアーで会場に詰め掛けたファンは、述べ32万人に達したという。ジョージ・ルイスのオールスターズは翌年の39年5月、



40年5月と都合3回来日し、労音出演によって日本中を巡演した。河野さんはこの三回の日本ツアーを引率し、ステージで司会を務めた。



ホット・クラブの会員に囲まれて、勲四等瑞宝章を祝う会(中央左が油井さん)=赤坂全日空ホテル(平成9年2月)

巡業中にジョージ・ルイスと河野さんが銭湯で互いに背中を流し合ったという話も聞いたことがある。

このジョージ・ルイスの日本公演をきっかけに、河野さんはニューオリンズ・ジャズへの思い入れがより強くなった。昭和46年(1971年)には、日本で最も人気があり幻の名盤と言われ

たあの「ジャズ・アト・オハイオ・ユニオン」をダンレコード(ミノルフォン音楽工業)から日本盤として発売することに成功した。翌年の47年には、アメリカン・ミュージックのウィリアム・ラッセルと契約し、これもジャズ喫茶でしか聴くことのできなかったA Mレコードを、別テイクや未発表の演奏を含めて、同じダンレコード(徳間音楽工業)から20枚のシリーズものとして発売にこぎつけた。これらは河野隆次氏なくては出来なかった功績である。日本のトラッド・ジャズ史に一番の功績を残した評論家であった。

河野さんは昭和60年(1985年)3月16日午前9時11分、脳内出血のため横浜中央病院で亡くなられた。桜木町かどこか駅のホームで突然倒れ、救急車で運ばれたと聞いている。まだ65歳でこれからもお付き合いできると思っていたので、突然の訃報が残念でならなかった。私のジャズの先生は今でも河野隆次さんで、モダン・ジャズには目もくれず、ひたすらトラッド・ジャズを聴き続けている。

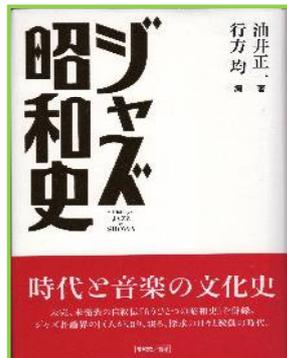
オールマイティなジャズ評論家、油井正一氏 リアル・ジャズに関しては恐らく日本一の見識

油井正一氏(写真左下)はニューオリンズ・ジャズから前衛ジャズに至るまで幅広く、オールマイティなジャズ評論家であった。リアル・ジャズに関しては、恐らく日本一の見識を持っていたのではないかと思う。日本を代表するジャズ評論家を一人あげろといわれれば、長年の総合的な実績から、油井正一氏と答えて異論のある人はいないだろう。

油井さんとはホット・クラブの月例会で毎月お目にかかった。書記長をされていて、ほかの仕事よりも例会を優先させ、欠

席することは全くなかった。長い間いソノてルヲ氏と小川正雄氏の三人で、クラブの運営に当たっていた。ホット・クラブの例会は、新譜のレコードを一般より早く聴くことが出来ること、会員によって紹介される自分のレパートリー以外のレコードを通じ、新しいジャズの世界が開けることなどのメリットがある。更にそれに加え油井さんは、海外ジャズメン

どのイベント情報、ジャズのコレコード会社のジャズ映画情報などのトピックスを提示、クラブに参加



油井正一語り下ろし;ジャズ昭和史(ディスクユニオン、平成25年)

の動向、フェスティバルな報、来日ミュージック情報、企画情報、ジ、その時々供した。ホッすると、世界

のジャズの動きがそれなりに把握できたのである。これは私にとって大きな収穫だった。例会が終わった後の居酒屋で行われる二次会においても同様で、更に詳しい秘密情報や、我々会員の質問や意見にも真摯に答えてくださった。

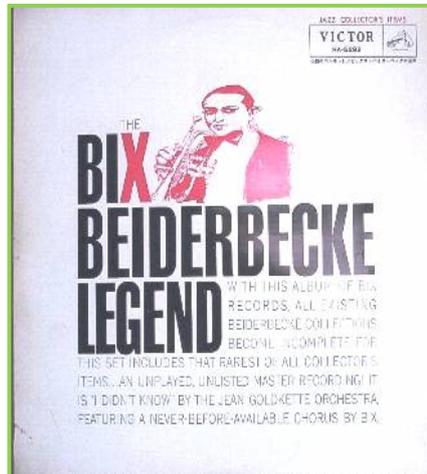
油井正一氏は大正7年(1918年)8月、福島県出身の貿易商の長男として横浜市に生まれ、大正13年の関東大震災で神戸市に移住、神戸の尋常小学校、中学を経て、昭和16年3月に慶應義塾大学法学部政治学科を卒業した。昭和10年(1935年)頃からジャズに興味を持ち、11年神田のリズム社で購入したユグ・パナシエの名著「ホット・ジャズ」でジャズ音楽に深く感動、レコードの蒐集と研究を始める。17歳の頃ベリー・ホリデイの歌が入ったテディ・ウィルソンのブランズウィック・レコード「Life Begins When You're In Love」(1936年1月録音)を購入したが、クラリネット奏者がわからなかった。その後「ヴァラエティ」誌(後の「ダンスと音楽」)に河野隆次氏の「テディ・ウィルソンとレコード」という記事

が出て河野さんに会ってみると、2年も前からレコード喫茶で年中顔を合わせていたファンだったという。「ヴァラエティ」には昭和14年から寄稿するようになった。美人歌手のナン・ウィンに手紙を出し、名指しの写真(プロマイド)をもらって大喜び、これを「ヴァラエティ」の表紙に提供したのもこの頃だ。戦前のこの当時ナン・ウィンという歌手を知っていただけでも大変なものである。昭和15年の夏にはSPコレクションが3000枚に達した。ジーン・ゴールドケットとポール・ホワイトマン楽団のビックス・バイダーベックやベン・ポラック時代のベニー・グッドマンは大半揃っていたという。このコレクションも河野さん同様、戦災ですっかり灰になってしまった。

軍隊には3年半いたという。初年兵時代は会津若松で歩兵、少尉時代も仙台で歩兵、その後東京のお台場や月島で高射砲を担当した。初年兵当時たった一度許された外泊に、まだ学生だった河野さんがメズロウやエリントンに25枚ほど抱えて、わざわざ福島まで慰問に来てくれ、一晩中蓄音機にかじりついてジャズを語り合ったという。

戦後は昭和27年に「ミュージック・ライフ」、その後「スイング・ジャーナル」に評論を書く傍ら、朝比奈次郎の名でラジオ神戸(現ラジオ関西)のジャズ番組を担当するなど、関西で活動していた。右近雅夫のオリジナル・ディキシシーランド・ハート

ウォーマーズをバック・アップ、ラジオ放送や通信販売レコードを通じ、その紹介に務めた。当時はクラリネットを吹いたという。油井さんの実弟義光氏と善三郎氏もクラリネットを吹き、ハートウォーマーズで録音を残しているが、本人の演奏は残念ながらレコーディングされていない。クラリネットは好きな楽器だったようで、「ブラインド・ホールド・テストでアルバート・ニコラスが出たら、絶対に当てる自信がある」といつていた。



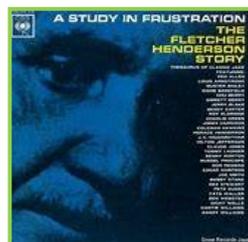
“X”シリーズ「ジャズ・コレクターズ・アイテム」からビックス・バイダーベック

昭和30年(1955年)4月東京に移り、プロのジャズ評論家としてジャズ啓蒙活動に本格的に取り組むようになった。河野さんがディキシシーランド・ジャズのオーソリティとすると、油井さんは黒人スイング・ジャズのオーソリティといえるだろう。例えばベニー・グッドマンよりフレッチャー・ヘンダーソンを高く評価した。

昭和40年日本ビクターが発売した日本盤“X”シリーズ「ジャズ・コレクターズ・アイテム」は、全て油井さんのプロデュースによるものである。このシリーズは、スイング時代の黒人ジャズを中心に12吋LP全18枚

288曲からなり、LPとしては日本で始めて発売になるものばかりの傑作集であった。これはその後ヴィンテージ・シリーズ、栄光の遺産シリーズなど形を変えて再発されているが、この“X”シリーズが最も要領を得た名企画であった。

そして油井さんの最大の功績は、日本コロムビアがまだCBSレコードと原盤供給契約を交わしていた昭和39年から42年の間に発売した組み物LP「コロムビア・ジャズの宝庫シリーズ」の企画、監修だと思ふ。コロムビア系のSP



原盤を網羅したこのシリーズは、第1集から第15集の15組からなり、LP47枚673曲の膨大なものである。このカートン・ボックス入り日本盤の選曲は、ジョージ・アヴァキャンのアメリカ盤に準じているものの、解説については、デューク・エリントン

を野口久光氏、ウディ・ハーマンを瀬川昌久氏に譲った以外は全て油井さんが書かれた高レベルのもので、今となってはこれも大変なジャズの遺産である。例えば「ビックス・バーダーベック物語」(Columbia PMS-115/7C)は日本語で書かれた最も長いビックスの研究書である。油井さんが大のビックス・ファンであることは広く知られているが、ビックスを黒人ミュージシャンに影響を与えた数少ない白人ジャズメンの一人として、高く評価していた。「ベシー・スミス物語」(SL-1225/7C)と「ベリー・ホリデイ物語第1集、第2集」(PMS-93/5C, SL-1229/31C)

では、全歌詞を英文その大意を日本語で紹介、その曲の聴きどころを解説している。「フレッチャー・ヘンダーソン物語」(写真上=PMS-104/7C)はフランク・ドリッグスの翻訳であるが、ヘンダーソンの生涯を知り得る日本語の文献はこの解説書以外にない。そのほかの解説書も全て凄く、質量共このシリーズ以上の仕事を残している日本のジャズ評論家を私は知らない。これらのコロムビア系原盤はその後CBSソニーに移り、以降トラッド・ジャズの企画が全く無くなってしまったのは残念だ。

所属した音楽団体に、ホット・クラブ・オブ・ジャパンの書記長、会長を初め、音楽三田協会(会長)、日本音楽家協会(顧問)、国際ジャズ教育者協会日本支部(名誉会員)などがある。平成8年(1996年)の文化の日、油井さんの半世紀にわたるジャズ啓蒙活動の功績に対し、勲四等瑞宝章が授与された。この受賞をお祝いする会は、平成9年2月赤坂全日空ホテルで行われた。ホット・クラブのメンバーからも祝福を受け、油井さんも大変喜んでおられた。

油井正一氏のジャズ評論は、その基本を「ジャズはアメリカの黒人民族から発した新しい音楽」と位置づけ、黒人色の濃い演奏を主流とし、ジャズの歴史に立脚した説得力の高いもであった。

人種差別を口にしないアメリカの評論家を「アメリカのジャズ評論家はジャズをわかっていない！」といつも言っていた。ユーグ・パナシェはビ・バップにはあまり理解を示さなかったので異論のある人もいると思うが、私は、油井さんはパナシェの直系だと思っている。後継者に大和明氏がいた。

油井さんが亡くなられたのは平成10年(1998年)6月8日。脳梗塞79歳だった。葬儀は11日中目黒の正覚寺境内実相会館で執り行われ、瀬川昌久、笈田敏夫、山下洋輔の三氏が弔辞を述べられた。式場にはビックス・バイダーベックのレコードが流れ、出棺のときは弔問者全員黙祷の中、デューク・エリントンの古い演奏でお見送りした。ミュージシャンも多数参列したが追悼演奏はなく、ジャズ・レコードを何よりも愛した油井さんを偲ぶにふさわしい告別式であった。

油井さんがその生涯に集めた夥しい資料や記録は、平成14年(2002年)に慶応義塾大学アートセンターに寄贈された。書籍、文献、音声資料、映像資料、私文書など10,000点に及び、それらは几帳面に整理されてあったという。これらは「油井正一・ジャズ・アーカイヴ」として平成21年(2009年)公開の運びとなった。

著書も数多いが、ジャズの歴史を逸話や自身の好みでまとめた「ジャズの歴史：半世紀の内幕」(東京創元社昭和32年)がおもしろい。代表作は昭和「ジャズの歴史物語」(写真上=スイング・ジャーナル社47年)であろう。亡くなってから出版された「油井正一語り下ろし；ジャズ昭和史」(ディスクユニオン平成25年)は、昭和史となっているが自分史と違ってよく、ジャズとの拘わりが詳細に語られていて、油井正一を語るには欠かせない資料である。

ありがとう！柳澤さんから素敵な記事 みな JAZZ に夢中で良い時代だったあの頃

中学時代、自己流でトランペットをはじめ高校に入学、ブラスバンドの部員になったころ、ジャズ映画が大ヒットしていた。今でいえば「タイタニック」や「スター・ウォーズ」並みのヒットだったのだから、みなジャズに夢中、良い時代だった！

先輩の名トランペッター、奥山康夫さんにラッパとジャズを教わった。当時、家は父の勤務の関係で宇都宮だったので、雪谷のそばにあった祖母の家から目蒲線を使って上石神井まで通っていた。奥山先輩に連れられて行き知ったのが電車の途中駅、恵比寿で奥田宗宏さんがやっていらっしゃったジャズ喫茶『ブルースカイ』と渋谷の『スウィング！』。恵比寿のクリフォード・ブラウンにもしびれたが、渋谷スウィングでかかるルイやジョージ・ルイス、キッド・オリーの虜になった。

当時流行りのフランス映画から抜け出したような、マスターの彼女で店のカンバン娘だった「さっちゃんの魅力」も大いにあったと思う。両親の監視もないので、ブラスの練習が終わると夜遅くまでスウィングに入りびたつた。タバコは吸わなかったがスウィングの有名なマッチを授業中いじっていて、先生にすっかり常習喫煙者と間違われたことも懐かしい。もちろん詰襟の学生服である。

当時の渋谷スウィングの常連さんには、大勢の「先輩」ジャズオタクがいた。特に覚えているのは、当時国学院生で現在仙台青葉城護国寺宮司の田中光彦さん、そしてもう一人詰襟の学生服で私よりも年上、以前から通っていたのが、この方、柳澤安信さんだった。お二人とも『渋谷スウィング』のレコードはほとんど知っている古参スウィングっ子だった。柳澤さんはとても当時から物静かな方で、今も変わらない。そして学ランだった当時から今まで、雰囲気はほとんど変わっていない、、、当時から老けていたのか？ いや、今がお若いのである。永年一緒にジャズを追いかけてきた仲間。彼はどんなジャズにもお詳しいが、特に白人コルネット奏者、伝説のビックス・バイダーベックにかけては右に出るものがない。私はサッチモ…。なんだか派は違うけれど「戦友」みたいな感情を感じる。

田中光彦さんも、柳澤さんも永年WJFの会員として、24年前、1994年の会発足時から会を支えてくださっている！！この度、「戦友」柳澤さんから、素敵な記事をご寄稿いただいたので、謹んでここにご紹介させていただく。私達の世代皆が懐かしい、ジャズ評論家の皆様のお話。ありがとうございます。

(外山喜雄)



写真家、佐々木美智子さん、84歳
63年、サッチモ公演を撮影、出版！
新宿ゴールデン街でバー「ひしょう」を経営

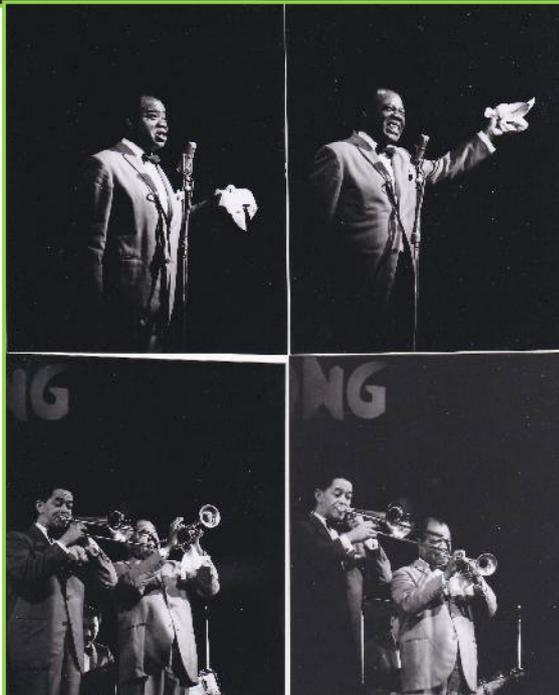
新宿ゴールデン街でバー「ひしょう」を経営する元写真家、佐々木美智子さん(84)が、このほど「新宿 ゴールデン街のひとびと」(写真右)という著作を上梓された。その中には1963年、東京・大手町の産経ホールでサッチモが公演した当時の写真が数カット、しっかり収められている。

それに伴う佐々木さんの数々のエピソードが、WJF会員でしばしば貴重なジャズ情報を会報に寄せて下さっている宮城健さんから外山喜雄さんのもとに今回も届けられてきた。

まったく偶然にも、同じ話が元レコード会社ユニバーサル・ミュージックの洋楽ジャズクラシック部長、青野浩史さんからも、さらに彩を添えて外山さんに寄せられてきた。「これはまさにサッチモのいたずらに違いない」と外山さん。さっそくご報告！

この話は、たまたま宮城健さんが、新宿ジャズ祭りの帰り、関西からのジャズファンと一緒に、NHKで特集されたゴールデン街を見てみたいと、ふらっと入った店が、このバー「ひしょう」だったことから始まる。宮城さん曰く。2014年5月「新宿・春の楽しいジャズ祭り」の帰り、たまたま訪ねたゴールデン街でチャームな佐々木美智子ママに出会い、そしてサッチモの写真に繋がったという。

ちょうどその頃、新宿ゴールデン街がNHKの小さな旅で紹介され、それを見ていた大阪から来たジャズ仲間の希望で新宿ゴールデン街



書店や出版元では、お求めになれませんので、同誌のご購入は、直接「ひしょう」でお願いします。

を訪ね、偶然入ったのが美智子ママの店「ひしょう」だった。

その後、ママの武勇伝を聞きたくて何度か通っていたら、昔サッチモを撮った！と聞き、写真をぜひ見たいと通いつけていたところ、ついにネガが見つかり、プリントしてもらうことができ、16カットを頂戴した。

ということで、サッチモの写真を撮った佐々木美智子さんの写真集がやっと出版され3月21日から23日、出版記念があり、宮城さんも出席、本を手に入れて、外山さんのもとに写真を送ってくれた。

その中には、サッチモの写真がかっこよく載っていた！「添付写真ご参照下さい」とのこと。撮影は写真家でもあった佐々木さんが1963年、

場所は東京・大手町の産経ホール。2列目の客席から撮影したものだという。

この偶然に、もう一つが加わった。青野浩史さん。彼は、MCAビクター時代、サッチモハウス開館に向けて50万円の寄付を社からくださって、1998頃届けられました！！

彼は、石井一さんの会のスタッフで、その連絡で携帯に電話したら、何と、彼のいたところがこの「ひしょう」だった。「外山さん！！」とあちらも興奮気味で、「サッチモの素晴らしい写真を撮った方が…」と。彼も、早稲田の友人に連れられて、たまたま「ひしょう」に行ったそうです。おまけに、隣に座った人が、また偶然ジョージ・ルイスのファンだったそうで、青野さん、「しかも偶然でしょうが、隣のお客がジョージ・ルイスについて語り始めて、驚くは笑うは…！！」

「新宿の店での偶然には

驚かされました。北海道の道東(中標津)在住の早稲田の

先輩が『同じ道東の根室出身で著名な女性がゴールデン街で店をやっているので行こう』と言うので、なんの予備知識なしに訪れて話をしていたところ、サッチモの話になり、ご本にあるサッチモの写真を見せてもらいました。その時点では宮城様の事を存じ上げずにおりましたので『ネガがみつかってプリントを熱心な方にお渡ししたんですよ』とママがおっしゃるので、「へえ、どなたなのだろう?」と思っておりました。他のお客さんがこれまた偶然でジョージ・ルイスのファンだったり、ママご出身の根室にある(日本最東端にある)ジャズ喫茶「サテンドール」がこの度、閉店したりで、なんとか根室のジャズ文化を絶やさないために根室市が後任者を公募していて、道東好きの私(青野)も『思い切って根室に移住してジャズ喫茶のオヤジになろうか?』と考えた話とかいろいろ盛り上がりました。ともあれあの店に連れて行ってくれた早稲田の先輩にも感謝ですし、外山さんとその場でお話も出来て、『こういう偶然があるんだな!』と酒がまわった夜でした」と青野さん。「米 Decca に始まり『ハロー・ドーリー!』の Kapp、『この素晴らしき世界』のABCなど、サッチモの大半のレパートリーとヒット曲を有するMCA社が故に、会社を説得してご寄付させて頂きました」と青野さんは続ける。

秋田 明大
足立 正生
石塚 俊明
石橋 遠司
岩本 茂之
大木 雄高
太田 篤哉
長部 日出雄
北村 皆雄
黒田 征太郎
沢木 耕太郎
坂田 明
早川 節子
長谷川 和彦
長谷 百合子
原 一男
左 時枝
高橋 伴明
喰 始
外波山 文明
友川 カズキ
清 よこ
南らんぼう
三上 寛
山下 洋輔
山谷 初男
森山 大造

<佐々木美智子さん>1934年北海道根室市生まれ。22歳で上京。新宿の伊勢丹裏でおでんの屋台を引いた後、日活撮影所の編集部で3年勤務。東京総合写真専門学校で写真を学び、日大全共闘、映画のスクール写真などを撮る傍ら、新宿ゴールデン街で〈Bar むささび〉、新宿・歌舞伎町で「ゴールデンゲート」などを経営。79年にブラジルへ渡り、アマゾンで9年間、飲食店やペンションなどを経営する。88年サンパウロへ移り、私設図書館を創立。93年に帰国。ブラジルから帰国後の19年間は伊豆大島に住んで、ブラジルに移民して亡くなった人々の魂を祀る観音堂を守り、2013年都内に移住し、翌年から新宿ゴールデン街に戻り84歳のいまもバー「ひしょう」に立っている。

今回の著書は、1960年代後半から、新宿ゴールデン街で学生運動家や文化人らに知られた“伝説のバー”を経営しながら、全共闘運動などの写真を撮った女性が60年以上撮りためた、濃厚で濃密な「新宿村の住人」300人余の群像!—出版パーティーには、上記、添付の方々が、発起人でした(佐々木さんから=敬称略)。

佐々木さんは、外山さんの友人の政治評論家、高野孟さんとも親しい方です。

(この写真集「新宿」は、5月12日発行の産経新聞読書欄にも掲載されました)

3月4日「西銀座ジャズひな祭り」 外山恵子&Jazz'n Babiesが熱演 女性リーダー10数人、7会場で競演



リーダーの重責をにこやかにこなした恵子さん

3月4日(日)、今年もめぐってきました、素敵な「西銀座ジャズひな祭り」。恵子さん率いる**外山恵子&Jazz'n Babies**はじめ女性リーダー10数人が西銀座7会場で競演。例によって恵子姫と外山喜雄(tp,vo)、広津誠(cl)、粉川忠範(tb)、藤崎羊一(b)、山本勇(ds)が熱演を繰り返す。甘酒ならぬワインやらビール、ウイスキー、ひな祭りオリジナルカクテルを傾けながら演奏に耳を傾ける幸せ

いっぱいの一と時だった。

(写

真:相馬威宣)

外山恵子&Jazz'n Babies は今年も午後3時15分、銀座カレラ式番館のライブハウス「シグナス」で演奏スタート。恵子さんはリーダー、MC、ピアノ、バンジョーと大忙し。それでも会場を埋めたおなじみのファンの皆さんにちよっぴりリラックスして、ユーモラスな司会を続ける。「思い出のニューオーリンズ:Do You Know What Means to Miss New Orleans」、「インディアナ」、恵子さんのバンジョーをフィーチャーした「讃美歌312番、星の世界(いつくしみ深き):What a Friend We Have in Jesus」など熱演が繰り返された。

午後4時半からニューギンザビルの「オリオンズ」に場所を変える。シャンデリアと美術品に囲まれたステージ(写真下の2枚)で恵子さんのバンジョーをたっぷり聴かせた「ワシントン広場の



夜はふけて」、フォスター・メドレーで「金髪のジュニー」、「スワニー河」、そして「バイ・バイ・ブルース」ほか。心

温まるひな祭りはファンの笑顔に囲まれて幕を閉じた。また来年のお楽しみ!

森田千葉県知事のラジオ番組に出演

**「ジャズのスイング感には明るい未来が」
「聖者の行進」に大乗り! 素敵なコメントもいただく**

文部科学大臣表彰は、朝日新聞千葉前県版、栃木版などで大きく紹介されました。

この記事がきっかけとなり、TBSラジオのレギュラー番組『千葉ドリーム!もぎたてラジオ』へのゲスト出演のお呼びがかかり4月2日、私たち夫婦が出演しました。(放送は4月29日12時30分)。

この番組は、千葉県知事・森田健作さんとTBS木村郁美アナウンサーがキャスターとなり、毎週日曜日のお昼、12時30分から千葉県に関係の深い人々をゲストに迎えている番組。

音楽界でも活躍する知事は、私たちに大きな関心を示され、スタ

ジオ生演奏コーナーでのバンジョーとトランペットデュオの「聖者の行進」では、木村アナ



左から森田健作千葉県知事、外山夫妻、木村郁美アナ (撮影:香川光彦さん)

とともに大乗り。「ジャズのスイング感は、何か明るい未来を感じさせますよね!!」との素敵なコメントまでくださった。

1983年以来、千葉県浦安市に住み東京ディズニーランド出演23年、千葉県とは深い縁のある私たちが、長年ジャズ界で活動し国際親善にも貢献、外務大臣表彰、国家戦略大臣感謝状、第一回ジャズ大賞、文部科学大臣表彰等を受けたことに森田知事は深い興味を感じられたようで、移民船でのニューオリンズへの渡航、銃に代えて楽器を、ハリケーン被害支援、そして東日本大震災後、両国の子供たちをジャズで結んだ親善等、木村アナともども長年の活動に驚きと称賛の言葉をかけて下さった。

2人の歩んできた道に、若き日、正義感と情熱あふれる青春スターとして大活躍した森田知事の感性に訴えることが少なくなかったようだ。

(外山喜雄)

岡山・高梁市有漢町有漢でセインツ熱演 酒造コンサート「JAZZ in UKAN」 セインツのバンド名入りお酒も販売

岡山・高梁市有漢町有漢の酒造会社、芳烈酒造「酒蔵」何とも珍しい…と言っても、もう24回も開催されている酒造コンサート「JAZZ in UKAN」が今年も4月15日、外山喜雄とデキシーセインツを迎え、賑やかに開催された。

備中高梁「JAZZ in UKAN」…本当に楽しい体験をし



てきました。有漢町…なかなか歴史のある地方です。

もう30年、毎年桜の時期にジャズイ

ベントを開催、いままではモダンジャズがメインでした。

主催の芳烈酒造の社長、難波国夫さん並びにスタッフの皆さん…宮田楽器の山田さん、そして来場された観客の皆様も、本当に明るくて!!

大阪、神戸のジャズ愛好団体、ODJC(オリジナル・デキシーランドジャズ・クラブ)にチラシをDMしてもらいましたので、神戸、姫路からも何名様か来場してこられて、なおさら雰囲気盛り上がりました!!



セインツのバンド名入りお酒も販売

この日は、猛烈低気圧が通過、天気も危なかったのですが、幸運にも晴天となり、本当に暖かい雰囲気に包まれた有漢町の酒造コンサートでした。

奇しくも今年明治150年、芳烈酒造は1918年の創業…ジャズが1917年の初レコードですので不思議な一致。当方の感触としては、地方の皆さんなのでノリはどうかあと心配していたところ、のっけから大乗りになり、「サッチモ!!!」と掛け声はかかるは、傘を持って踊り出す人は出るは、2時間半、熱気あふれる“櫻芳烈桜まつり”になり、メンバー一同、いたく感激して帰宅しました!!

(外山喜雄)

祭りだ!ジャズだ!デキシーだ!
デキシーランド×SHOWA
 川崎市の昭和音楽大学でセイント熱演

小田急線「新百合ヶ丘駅」から徒歩4分ほどの川崎市麻生区にある昭和音楽大学は、音楽部にジャズコースもあるユニークな大学。

この「デキシーランド×SHOWA」コンサートは5月4日午後5時半から同大学南校舎5階ユリホールで華やかに開催され、外山さんの第1回ジャズ音楽大賞受賞、文部

科学大臣表彰を記念するにふさわしい素晴らしいイベントとなった。

外山喜雄とデキシーセイントは、外山喜雄(tp,vo)・恵子(p,bj)、広津誠(cl)、粉川忠範(tb)、藤崎羊



田中玖実さん(左)と外山さん

一(b)、サバオ渡辺(ds)の面々。この日はほかにデキシーキャッスルの若きリーダー、青木研さんも参加し、絶妙のバングジョーテクニックを独演、同大学講師で国際的なトロンボーン奏者、池田雅明さんも熱演した。

セイントは「この素晴らしき世界」「スウィングしなげりや意味がない」「ビビディ・バビディ・ブー」などを披露、フィナーレの「聖者の行進」では、音楽大学らしく聴衆の学生さんたちにも「楽器持ち込み大歓迎!」ということで、みんな揃って会場を行進、まさにジャズの原点ここにあり!「祭りだ!JAZZだ!デキシーだ!」を大いに盛り上げた。

昭和音楽大学音楽芸術運営学科アートマネージメントコースに学ぶ田中玖実さん(4年)がお仲間と発案企画、学校、学部も応援して実現した企画。(次回100号に詳報)

ご寄付と嬉しいお手紙

ありがとうございます

◆吉原郷之典様

(うつのみやジャズのまち

委員会会長)

5万5882円

結成12周年を迎えた、吉原さん達が指導するうつのみやジュニアジャズ・オーケストラ!毎年コンサートでニューオリンズの子供たちを応援する寄付を集め、送ってくださっています。今年は3月21日第9回のコンサートが開催され、多くのご寄付が集まりました。

各メディアにも活躍ぶりがたっぷりと…

2月18日の朝日新聞栃木版、宇都宮版、3月2日の浦安新聞、週刊新潮3月1日号など外山さん、外山さん夫妻、デキシーセイントの活躍ぶりがたっぷりと掲載されました。

募集中

♪ジャズを愛する皆様

どうか会員になって下さい!!

また皆さまのお知り合いの方々にぜひ、WJFへのご入会をお勧め下さい

=WJF年会費=

一般会員(General Membership) ¥6,000

学生会員(Student Membership) ¥3,000

賛助会員(Friends of Louis Armstrong) ¥12,000

■会費のお振込先■

郵便振替 00110-4-415986

ワンダフルワールド・J・F

銀行振込 三菱東京UFJ銀行浦安駅前支店

普通:5175119「ワンダフルワールド」

お問い合わせ:WJF事務局

TEL:047-351-4464

FAX:047-355-1004

Email:saints@js9.so-net.ne.jp

日本ルイ・アームストロング協会 HP

<http://wjf4464.la.cocacn.jp>

編集長から

外山喜雄のパワースポット / 不思議な縁のスクランブル交差点」が会報99号の隠れたテーマとなりました▼石井一さんの出版記念パーティーには、石井さんをはじめ、佐藤修さん、小針敏郎さん、前田憲男さん、瀬川昌久さん、阿川泰子さん、丸山繁雄さんら多数のジャズ界の仲間たちが集結▼ピックス・バイダーベック研究の第一人者、柳澤安信さんの力作秀逸寄稿に外山さんが寄せたコメントは、戦友!「新宿ゴールデン街のバー」ひしうのママ佐々木美智子さんとサッチモ写真の記事では、宮城健さんと青野浩史さんのエピソード。ひしうでサッチモ&ジョージ・ルイスの話をしていた青野さんに外山さんから電話が掛かってきたという偶然▼TBSラジオ「もぎたてラジオ」に外山夫妻がゲスト出演した際の木村郁美アナが、外山さんの早稲田学院時代の同級生、木村武司さんの次女と判明▼初ジャズレコード1917年から101年後の今年2018年4月、1918年創業の岡山芳烈酒造でセイントがコンサートを開催。不思議な一致。▼以上は、外山さんの身の回りで起こった不思議なスクランブル現象の一部なのであります。(山)